

三木さんとマキヤベリズム

私は政治家を志しけわしい選挙を控えて、あれやこれやと気を揉んでいた頃、二、三度鷲谷の私邸に三木武吉さんを訪ねて政治家としての心得などについて高示を仰いだことがある。門をはいると昔風の金の板が吊られてあつて、備え付けの棒でそれを二、三回叩くと女中さんが顔を出す。一度奥へ引込んで奥の方の指示を受けてから庭石伝いに客間に通してくれる。来客の多い時にはいきなり茶の間に通されたこともある。

三木さんは気軽に勿体ぶらないですぐ会つてくれて、何くれとなく話をきかせてくれた。その時どんな話を承つたかさだかに思い出せないのであるが、私個人に対する親切な忠告や思いやりの言葉であつたことだけはよく覚えてゐる。

その後三木さんは何時の間にか牛込の方に転居された。そこに落着かれるのかと思つてゐると今度は千駄ヶ谷の方に移られた。面倒がらずによく転居ができるものだと思うが、これはどうも物事にこだわらない性格の然らしむるところだと思ふ。時折私はお訪ねするが、その度毎に何時

に渝らぬ気さくな態度で何かと話をしてくれたものだ。そしてその話も、飾り気のない思ったままを吐露されたもので、私はそれから権謀術数家の体臭を嗅いだことは一度もなかった。

昭和二十七年九月の選挙に三木さんは郷里高松から立候補した。それは三木さんにとっては追放解除後第一回の選挙であったが、その選挙戦において、三木さんは既に反吉田的言動を露骨とまでは行かないが、相当表面に押し出して居られたようだ。選挙がすんで、当の吉田さんが総裁のバトンを鳩山氏に渡さないことがハッキリしてから、三木さんは露骨に且つ公然と反吉田に踏み切り、遂に御大鳩山氏をかついで分自党を結成した。そのため吉田さんは翌昭和二十八年の三月十四日、直ちに衆議院を解散し、私も無準備のまま第二回目の総選挙に臨まなければならなかった。

この選挙で自由党は大した凋落をみせず依然二〇二名の多数を獲得したのであるが、当の分自党は解散前に比して若干議席を失い、分自党にとつての受難期、三木さんにとつては不遇時代が訪れたのである。そして暫く揉みに揉んだ末、御大の鳩山氏は分自党の切り盛りに自信を失ったのか、憲法と外交の調査会を自由党に設置するという条件と引換えに分自党の大部分を引連れて再び自由党に復帰してきた。

ところが三木さんは同志七名と共に分自党の孤塁を守って自由党に帰ってこなかった許りでな

く、反吉田の闘志を愈々燃やし続けて一步も後退しなかった。七人の侍をひきいて本来ならばとるに足らぬ一握りの勢力であるべき分自党は、自由党が二三〇名という絶対多数に一寸足りない勢力であつたことも手伝つて、時折衆議院のキャスティング・ボートをにぎり侮り難い勢力をもつていた。

昭和二十九年三月副総理の緒方氏が解党公選による保守合同がらん頭の急務であるという所謂緒方構想を提案したのに対し、三木さんは真向から「吉田が総裁になるのでは不可」という一線を株守しつつ逐次反吉田勢力を手中に収めて、その年の十一月二十三日には、日本民主党を結成し、鳩山氏を初代の総裁に迎えた。

木枯の吹きすさぶ十二月七日、吉田内閣は遂に総辞職し、十二月十日には三木さん待望の鳩山内閣が誕生したのである。「俺は鳩山内閣が出来たら何時死んでもよい」と口癖のように言っていた三木さんであつた。鳩山内閣出現のため老血をしぼり抜いた三木さんであつた。それだけに鳩山内閣の誕生した昭和二十九年十二月十日は、三木さんにとっては生涯における最良の日であつたにちがいないまい。

人物鑑賞
ところが鳩山内閣が誕生すると、今度は「鳩山をやめさすことが俺の仕事になった」と三木さんは言い出した。そして総選挙で民主党が勝ち第二次鳩山内閣が誕生して間もなく、早くも三木

さんは突然保守合同の必要なる所以を明らかにし、そのためには何時鳩山をやめさすか判らないと言いだめた。この三木談話は内外に大きい波紋をえがき、自由民主両党間の保守合同の話は、これが契機となって、今尚続けられている。それは予想以上に難航であるようだが、当の三木さんは鳩山内閣誕生に注いだ以上の熱意と忍耐を傾けて、現にこの保守合同に挺身している。

以上が追放解除後における政治家三木武吉の歩んだ足跡のあらましである。彼の足跡を辿ってみて誰もが不思議に思うのは、あんなにまで鳩山内閣の出現を待望し、これに全精力を打込み、それが実現をみた以上は、もつと鳩山内閣をして政局に当らしめるべきであつて、その退陣を迫るようなことはこの際慎むべきであるうにということである。三木さんが鳩山内閣の誕生に賭けた期待には、日本の政局の現状に照しそれだけの積極的ならいがあつたにちがいないからである。それが今度は鳩山をやめさすのはこれからの俺の仕事だと言ふのだから、一見、解しかねる公人の仕草ではあるし、若干性急すぎるきらいもある。それでは全く政治をボールのやりとりをするスポーツのように心得ていると言われても仕方があるまいにと思ふのは、恐らく私一人ではなからう。

世間では三木さんを大狸だという。権謀術数にかけては比肩する人のない政界の古狸だという。又三木さんという人は所謂古い型の政治家であつて、凡そナショナル・インタレスト（国家的利

害)などには鈍感な謂わば政治屋なんだという見方をしている人もある位である。少くとも彼を中心として展開されている政局の表面相だけをみるならば、そういう評価も強^{あなが}ち的外れであるとは言い切れないものがある。更に他の人々は三木という人は、自分の思惑や利益に有利とみれば人を利用もするが、その反面人を弊履のように捨てもする人で、真に永く友誼を保つことができるような人ではないとも言ふ。寡聞にして私は三木さんについてそういう実例を知らないから、かかる批評の当否に判定を下すすがをもちないのである。

そこで私が想起するのは西洋哲学において問われるマキアベリズムのことである。世間では一般にマキアベリズムを以て、強者の支配或は権謀術数による飽くなき制圧を意味するとわりきっている。しかしマキアベリの「国家論」や「君主論」を繙いてみれば、マキアベリズムには三つの基本観念がある。その一つは申すまでもなく、フォルトナア(運命)であり、第二はネチエシタ(合理的手段)であり、その第三はヴィルテユ(徳)である。そして彼の言わんとするところはこうである。

賞 鑑 物 人

われわれはわれわれを廻る非合理的な運命に挑戦することはできない。その氾濫を防ぐためにせいぜい堤防を築き治水工事を施すことができるに止るのであって、その流れをせき止めてしまふなどということは思いも及ばぬことである。その動きの真髄を諦視することができれば、これに

対する合理的処置が明らかになり、これを遂行することによつてのみ、人間は最高の徳を實現するに至るのである。つまり彼の言わんとするところは、直線的にいきなり最高の徳の具現を仰望してもそれは人間の世界においては不可能事であつて、われわれは人間の世界に非合理においかぶさつてゐる運命の重圧を思い併せなければ、最高の徳に至る合理的手段がでてこないのだといふのである。

マキアベリにおける権謀術数と力の支配は、今述べたようにつねにその反面における運命の氾濫を防ぎとめるための死闘を意味すると解してはじめて、マキアベリズムの真骨頂が理解されるものとすれば、わが三木さんの権謀と術数の奥に、何が隠されているか、われわれはもつと謙虚に探り出してみる必要はないとは言えまい。老先の短い三木さんにとっては、当の鳩山氏に阿ねる意図もなければ、自家の権力政治を謳歌するつもりもないようである。ただ超自然と人生における葛藤の経緯を、冷徹なる観察者として、あくまでも究めつくし、僅かに残された彼の余命を、この運命との死闘に捧げていないとは言ひ切れないものがある。彼のやり口の一つ一つを切りとつて評価してみると、それには色々の見方も成り立つわけであるが、彼が死闘を挑んでいる非合理的な運命の系をたぐりよせて、じっくりとかみしめてみると、そこには人にいえない三木武吉の苦悶と焦燥がよみとれるような気がする。

「俺は先が短い。最早総理大臣になろうとも大臣になろうとも思わない。唯俺は死ぬる前に一つ、ええことをして死にたい」と彼は言っている。その「ええこと」というのは自己の栄進ではなない。鳩山一家の繁栄でもない。民主党の制覇でも勿論ない。彼の眼底には魔力的世界の激浪にさおさす弱いヘルプレスな日本国民の休戚が点滅して離れないことであろうと私は解したい。そしてその全精力、全知謀を傾けてその魔力に挑戦することによって同胞を守り抜こう、と彼はもがいているものと解したい。だとすれば彼もまた人の毀誉褒貶のまにまに孤独の境涯をかこつ淋しい人ではあるまいか。